

〈実践報告〉

生活科指導法・考 —創造的に生きる子どもたちの育成を目指して

長 谷 充 康

はじめに

生活科は、1992（平成4）年に創設された教科である。

教育現場には、きっと驚きをもって迎えられたことと思う。

社会科と理科が小学校低学年で廃止されたこと。そして、新教科の名称が「生活」科であったこと。詩人の谷川俊太郎氏がある書物の討論会の場で、「生活科という言葉聞いた時に、一種脅威を感じましたね。家庭から生活まで奪うのか、俺たちに何が残ってるんだ、みたいな。」^(注1)と語っている。氏のこの言葉のように、生活というものは身の周りにあり、到底学校が授業で扱うとは考えにくい代物だったと思われる。なぜ、低学年社会科・理科が廃止され、生活科が新設されたのか。教育課程審議会は、1987（昭和62）年の答申において、次のように説明している。

「低学年については、生活や学習の基礎的な能力や態度などの育成を重視し、低学年児童の心身の発達状況に即した学習指導が展開できるようにする視点から、新教科として生活科を設定し、体験的な学習を通して総合的な指導を一層推進するのが適当である。」

新設以来、四半世紀が経つ。そして今、発足当初の生活科が目指したものを再度見直し、次代の生活科のありようを考えようとする動きも出てきている。私の生活科の実践研究は、通信教育部のスクーリングに拠っているところが大きい。実践を振り返りながら、生活科の意義を再確認するとともに、今後の講座の在り方に活かしていきたいと考えている。

1. オープニング

私は、生活科指導法の講座の出発点として、学生に赤鉛筆を削ってもらおう。各自に肥後守（折りたたみナイフ）を配る。紙ティッシュの上で削ってもらおうのだが、ほとんどの学生にとって肥後守は初めて見る物である。使い方の前に、ナイフの刃の出し方が分からない。学生にしても、鉛筆をナイフで削ることは生活の中でなくなっている。

最初に学生がナイフを手にした時の反応は、「えっ!？」というものである。驚きとともに、

顔の半分は期待に輝いている。講座1日目の終わりにはその日の感想を書くことを学生に課すのだが、一人の学生は、この体験を次のように記している。

～生活科指導法の授業を受けて～

まず、小刀で赤エンピツ削りから始まり、実体験の大切さについて感じた。小刀を持つことも初めてで、小刀1つ眺めるだけでも時間が経つことを忘れそうになった。実際に削ってみるとカッターより刃の太さが厚いため安定して切ることができ、また切れ味も良い。赤エンピツ削りという1つの体験だが、初めて行うことには大人の私でも集中して興味を持って取り組む。このことから、生活科の授業に関連することは体験的学びがどれだけ子どもたちの興味を深くし、意欲を高めるものであるかと考える。

大人の私でもやってみたいと思うと集中して作業することを考えると、まだまだ経験の少ない子ども達はどれだけ感動体験するきっかけがあるのだろうか。1人ひとりに興味関心はあると思うのだが、その個性を感じ取る教師のアンテナと教育の感覚というものが、生活科の中では大きく影響することであることを深く感じる事ができた講義であった。(2016年度冬季生活科指導法スクーリング学生感想文による)

文章には、体験することの大切さと、同時に新しいことに挑戦するときのワクワク感がつづられている。私は、教育はきわめて創造的な仕事だと思っている。新しいことに期待と興味を持って、積極的に挑戦する姿勢を持ってもらいたいと願っている。

2. 知ること・学ぶこと

私の手元に、岩波書店刊『生活科一紙を作る・ヤギを育てる』(シリーズ授業 実践の批評と創造)という古い本がある。1992年の刊行である。

私は、この本を講座の最初の教材として使用する。書籍の表題にある「実践の批評と創造」のたたき台となっている授業は、生活科が完全実施される3年前の実践であるが、創設される生活科の授業づくりへの現場の先生方の熱い思いと試行錯誤の様子が伝わってくるものとなっている。

私は、この本を使って生活科の3つの問題点と、生活科の意義について学生に教授する。

問題点の1つは、「自分との関わり」をどう生活科の授業で作り出すかという点である。2つ目は、子どもが「自分との関わり」を感じ、主体的に学習活動に取り組むことができる単元を見つけること。3つ目は、生活科の学習活動の中での教員の動き、援助の在り方である。

「シリーズ授業」から取り上げた3つの生活科の問題点は、現在の生活科の授業づくりにおいても存在している非常に根本的で重要な観点である。学生たちは、講座の最終課題として学習指導案づくりに取り組むが、その際にも十分に留意すべき事項となっている。

この資料から学ぶもう一つの観点は、生活科の意義である。授業実践者である平林裕一先生は、たたき台となった「紙を作る」の授業への経過の中で、次のように述べている。

「一学期、一年生に入ったばかりの子どもを見て、その前の年は六年生の担任だったので、幼稚園、保育園の先生方の苦勞がひしひしと感じられました。そこで、身のまわりのことを自分でできるような子どもにしたいと思っていました。たとえば、ごみが落ちていたら自分から拾ってごみ箱に入れるとか、いちばん基本的なことを自分からできる子にしたいなあって思っていました。ですから、一学期のうちは、学校へ持ってきたのが汚れたら、家へ持っていかないで、学校で洗濯ごっこをするようなことをしていました。」^(注2)

この挿話の中に、生活科の意義の大切なものが含まれていると同時に、指導案作成に当たっての重要な事柄が話されている。

「身のまわりのことを自分でできるような子どもにしたい。」そんな心遣いと行動ができる子どもに育てたいというのは、生活科の目標の重要な1項目である。そして、学生に教示すべきは、物事、授業づくりの発端にはどの教科・学習活動にも共通することとして、「子ども観」があるということである。今、目の前にいる子どもを見、こんな子どもに育ててほしいという願いである。学習指導案でいうと「児童観」の記述である。教員はもちろんであるが、教員を目ざす者も、日頃からこの子ども観を鍛え上げていかなければならない。教師にとって「子ども観」と「教育観」は二つ一体のものであり、教育活動の中核に座るものである。

参考に、講座の2日目に設定する質問項目とそれに対する学生解答を掲載しておく。

[設問]

現代の子どもの課題を考え、生活科の目標との関連について述べなさい。

[学生解答]

現代の子どもたちは頭でっかちのような様子が見られる。詳しく知りもしていない知識だけが頭の中に入り、実際の体験や経験が不足している。そのような現在に、生活科の目標は提示されているものであると考える。具体的な活動や体験を通して、身の周りの人々を始め、自分が生きている周りの環境に触れていくことの大切さを示している。自分1人では生きていけないこと、周りを見つめ考える力をもつことによって、自分がどのように生きていくべきなのか、多くの関わりの中で知り、自身の力として身につけて自立への力をつけることが挙げられている。

課題のとらえ方、表現の仕方が非常にすっきりとしている。

単元設定に当たっては、現代の子どもの課題、ひいては地域の課題を念頭に置いて設定していかなければならない。生活科の授業は教科書を読み、その語彙を理解しただけでは何らの学習とならない。知識のみが頭に入り、しかも一般的な事象の知識のみを知ること

になる。文部科学省は生活科において体験的な学習法を強く推奨している。身近な題材を取り上げ、体験的に学ぶことを推奨しているのである。

3. 創る、体感する

先のオープニングの学生に赤鉛筆を削ってもらったところでも述べたが、私は、学生にとっても体感する経験が大切だと思っている。学生同士が互いの意見を交流し合うということも含むが、教材を実地に作ってみる、模擬授業に取り組んでみるといったことも大切である。そして、生活科の授業そのものを子どもと入れ替わって体験してみる。そのことによって、授業を受けている子どもの気持ち理解や、そして、子どもの側から見た授業の教育的価値を考えてみることも大切だと思っている。



2017年度・生活科指導法スクーリングより

先に紹介した岩波書店刊の『シリーズ授業 生活科』にはその授業風景が付属ビデオとして刊行されている。その「紙を作る」の学習を学生にも体験してもらう。4人で班を作り、相談しながらビデオで見た紙づくりを体験する。「やってみないと分からないこと」がある。現代では、ほとんど経験することがない紙づくり。その工程をビデオの子どもたちが生き生きと作業しているわけは何か。そして、授業の中で行うことの教育的意義は何か。学生自身が体験しながら考えてみる。私は、『シリーズ授業⑥ 生活科』に付属して刊行されている『ビデオ シリーズ授業⑥』につけられている付帯書に書かれている牛山栄世（当時長野市立小田切小学校教諭）氏の「ビデオ記録を見るために」の中の次の文章にその解答を見る。

この「紙を作る」の映像は、「直接体験」を重視する生活科の可能性を考えさせてくれます。

身も心も「紙すき」の仕事に向かい、淀みない「時」の中にいる子どもたち、かいがいしく、いそいそと動きながら、ごく自然で柔らかな集中を見せるからだ。必要なとき、すつと呼応し合い「事」を運んでいくからだとか。こうした子どもたちの息づかいやテンポにふれるとき、思わず心地よい気分になされます。と同時に、このようなからだをもつ1年生に、少なからぬ驚きさえ覚えます。ことばのたどたどしさに比べ、この子らのからだは、何と豊かに多くのことを語っていることでしょうか。いたい、この子らをこのようにさせている背景に、何があるのか。それを思わずにおれません。

ひとつには、「紙すき」という仕事がおのずから子どものからだに要求してくるものが考えられます。

首尾よく紙をすき上げる仕事の中には、それなりの段取り、手際、手加減といったものがあります。そして、これらは「ことば」ではなく「からだ」で会得され、わかっていく事柄です。手際、手加減といったもののありかをからだで探りあてていく学び。その学びが共有されるほどに、子ども同士のからだとかからだの間に、息の合った呼吸が生まれてくる。映像に見る子どもの姿に、そのようなことを感じます。

こうした中に、自分のからだでものをづくり出す「よろこび」、自分のからだに問いながら、会得されるものによる「自信」が期待されます。そして、これらは、自分を発揮していく力、つまり、子どもの「意欲」を育てます。

ここでの教師は、「紙すき」にこのような育ちを促す可能性を託しながら、子どもの動きをじっと見守っています。^(注3)

「紙すき」という仕事が自ずから子どものからだに要求してくるものがある。紙をすき上げる仕事の中にはそれなりの段取り、手際、手加減といったものがある。これらは「ことば」ではなく「からだ」で会得され、わかっていく事柄であること。また、そういった手際、手加減といったもののありかをからだで探りあてていく学びのなかで、子どもと子どもの中でその学びが共有されていく。息の合った呼吸が生まれてくる。これらのことは、人間がモノを作るときの姿勢についての根源的な学びであり、人と人との協働についての学びである。

私は、学生にも経験してもらい、この「紙を作る」学習活動の中の学び・教育的価値を体感してほしいと思っている。

4. 学習指導案をつくる

一人一人の学生が、生活科のある単元の学習指導案をつくれるようになることは、講座の大きな目標である。

学習指導案を作成するには、「生活科とは何か」という問いと、現代の子どもたちの課題を見つめ今の子どもたちにどんな学力を育てるのかという「生活科の目標」を持つことが大切である。そういった問題意識を持ちながら、カリキュラムを考え、単元の設定を行っていくのである。私は、講座の最終課題に学習指導案の作成を課しているが、その前に、学生の問題意識を問う次のような設問を課している。設問とともに学生解答の文章を載せておく。

[設問1] 生活科の授業づくりにおいて留意すべきことは何か。あなたの考えを述べなさい。

[解答A] 授業づくりにおいて留意すべき点としては、やはりテーマ決めであると考えてる。

児童観を教師がしっかりと把握し、他の教科では学べない今日的なテーマを題材として考えることが生活科としての役割であると考えてる。今、目の前にいる子ども

もたちを見て、どのような力をつけてほしいのか、どのような活動をし、どのような体験をしてほしいのかを察知する教師のアンテナと教育感覚によって導かれる内容であることが大切である。そのためにも、私自身が常にいろいろなアンテナを張り、様々な情報を自分の引き出しとして持っておくことも必要であると考えた。私自身も実りのある生活科の授業をしてみたいと考えることができた。

[設問 2] あなたが低学年を担当した時、生活科で最も実践したいと考える学習活動は何ですか。実践に対する動機・設定理由について述べなさい。

[解答 B] 私が低学年を持ったときに行いたい内容は「動くおもちゃ作り」である。長谷先生からお借りした教科書を眺めていると、「おもちゃ作り」という部分が目に入った。最初は単純に楽しそうだと思って見ていたが、内容を深めていこうと教材化するために考えていくと、更にやってみたいと思った。それは、おもちゃ作りを通してのゲームのルール作りである。現代の子ども達は近所の友だちと公園で遊ぶことが少ない。友達と一緒に話し合いながらルール作りを工夫していく。一定の距離感をもって、“楽しくする”という共通の目標に向かって考える機会としても実践していけると思った。また、その自分たちが作ったゲームのルールを使って小学校 1 年生を招待して一緒に楽しむ機会を持つことで、異年齢交流にも繋がっていける内容であると考えた。もちろん、おもちゃ作り際には理料的な部分も加わってくると思うが、このような内容を盛り込むことで生活科でも十分に行えると思う。

解答 A に含まれている「教師のアンテナ」と「教育感覚」という記述は注目すべきところである。

授業づくりにおいて、様々な活動のあり様から「これは！」というものを選択していく。この時に働くのが教師のアンテナと教育感覚である。教師という仕事を続けていく中で、最も大切にされるべきものである。「教師としての感性を磨く」と言ってもよいだろう。その作業は、日常的に「教育とは何か?」「教師とは何か?」を自らに問い続けるところから生まれてくるものであろう。

また解答 B では、「最初は単純に楽しそうだと思って見ていたが、内容を深めていこうと教材化するために考えていくと…」の文章が注目される。受講者の授業づくりへの姿勢がよく表れている。教師という仕事に向かう姿勢と言ってもいい。この姿勢は指導案づくりを重ねることで少しずつ身につけていくものである。いつもアンテナを張り、子どもの喜ぶ顔と結びつけながら教材化を考える。一つのことを出発点としながら無いものから在るものを作り出していく。創造と想像の世界である。学生には、「教育とは創造である」という認識が必要である。資料として、この学生が最終課題として提出した解答を添付しておく。

『生活科学習指導案』

1. 授業者：○ ○○
2. 対象学年：2年生
3. 単元名：『手作りおもちゃで あそぼう』
4. 単元の考察（子どもの実態、教材観、指導観）

第2学年に進学した児童は、少し大きくなった期待と不安が混在している。その中で、初めての存在である新1年生を前にして1つ年上のお兄ちゃん、お姉ちゃんになったという自覚をもつ時期でもある。今回、手作りおもちゃ作りをとおして、1年生との関わりをもつきっかけの1つとし、また物が動くことに関して興味を持ち「どうして」の視点で深めていけるようにしていく。

おもちゃ作りに関しては、おもちゃを作って遊ぶだけではなく、ゲームをするためのルール作りや自分たちの考えや工夫について発表する機会をもつ。ルール作りに関しては、近年遊びを友だち同士で工夫をすることが少なくなってきている背景から、互いが楽しむためにはどのようなルールがよいかを話し合うコミュニケーションの機会の1つとしている。

また、おもちゃ作りの工夫に関してはそのおもちゃの特質をつかみ、自分なりの工夫について「どうして」を深め、発表することで自分のものとしての定着を図ろうと考えている。教師は、おもちゃを動かす環境づくりや「どうして」の視点を基に児童の学びを深めていけるように適宜に声かけを行うようにする。

5. 目標

- ① どうしておもちゃが「動くのか」を考え、自分なりに工夫しておもちゃを作る。
- ② ゲームのルール作りを友だち同士で話し合い、意見を出し合って決める。

6. 評価規準

- ① 関心をもって、おもちゃ作りに取り組む。
- ② 話し合った結果、楽しいルール作りを行い、ゲームをすることができる。

7. 指導計画

〈事前〉

- ・何事に対しても「どうして」の視点を持ち、やってみようとするチャレンジ力を高めしておく。
- ・1年生との交流や関わりを多く持ち、交友関係を築こうとする意欲を高めておく。

〈事後〉

- ・自分で作ったものの発表会を行い、工夫や考えた点について共有する。
- ・1年生との交流会に用いてさらに楽しめるようにする。

8. 本時の学習展開

	教師の発問と児童の主な学習活動	準備物・留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○教師が手作りおもちゃを持参し、見本としてクラス全員の前で動かす。 ●教師が動かす姿を見て、自分たちでもやってみたいという意欲を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手作りおもちゃ ・児童の興味関心に合わせたおもちゃを提示する（好みや難易度）
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○動くおもちゃの動かし方を伝え、実際に動かしてみるようにする。 ○どのような点が楽しかったのかを児童から意見をもらう。 ○「おもちゃが動いているのは、どうしてかな？」の疑問を投げかけて、新たな視点を基にもう一度おもちゃに触れるようにする。 ○「どうして」の全体共有を図り、さまざまな要素について気づくようにする。 ●提示されたおもちゃを手に取り、実際に動かして遊んでみる。 ●実際に動かしてみて、楽しかった理由について全体共有を図る。 ●おもちゃの仕組みについての視点を基に「どうして」の考えを深くしていくようにする。 ●自分の気づきを全体の中で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃを動かすことができるように環境づくりをする。 ・楽しかった理由をしっかりと自分の言葉で表そうとするように促す。 ・おもちゃを動かしている児童に「どうして」という投げかけをし、考えが深まるように声掛けをする。 ・自分の考えについて、ワークシートなどで記録を取り、まとめていくようにする。 ・全体で共有できるように、様々なおもちゃについての意見を出すようにする。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○おもちゃの動く秘密を見つけ、動くためには色々な要素があることに気づくようにする。 ●様々な要素によって、動くことができていることに気づき、さらにおもちゃへの興味を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業のふりかえりを行い、次時についての見通しと学びの定着ができるようにする。

(注1)：岩波書店刊シリーズ授業『生活科』（実践の批評と創造）1992年刊行

(注2)：岩波書店刊シリーズ授業『生活科』（実践の批評と創造）「1 授業を批評する」P5～P6

(注3)：岩波書店刊シリーズ授業『生活科』（実践の批評と創造）「紙を作る」の実践についてP4